

# 学 習 の 方 法

## stage1 網を広げる

分野・方法などに制約をせず広く収集  
速読術・飲み nication も有効

## stage2 資料収集

興味箇所が確定すれば関係資料を広く収集  
資料 1 点ごとに次の項目を記録  
出典：掲載雑誌・発行年月  
レジメ（できるだけ詳細に）  
記録作成年月日

大学ノートに他種の記録と混成し作成順に記録  
大学ノートは電算機利用に比べて不便  
記録改竄（ざん）は不可能

資料収集・整理終了後  
全体の纏め＝報告書を作成  
他と同様に大学ノートに記録

## stage3 第 3 者に教える

場：同じテーマに興味を持つ多数の集まり  
参加者は発表者と同等の立場で討論に加わる  
報告者；  
場の参加者全員に内容を教える  
自分と同レベル以上にするのが目標  
この報告も stage2 の記録対象である  
この報告が学習の中心と考える

## 解説

上記は 1960 年代に、大学院生が採用していた中心的学習方法を私なりに纏めたものである。院生たちはこの勉強会を輪講と称し、多数の輪講を掛け持ちして学習の幅を広げかつ深めていた。輪講には指導教授が参加するものもあった。

**輪講**に参加し始めて数か月後、もはや院生の実力は学部学生と比べて格段に優れていた。

院生たちは輪講によって力をつけ、幅を広げるとともに、オリジナルなテーマを発掘して発表に結実、それが学会発表なら彼らの卒業要件の一つにもなった。立派な学習法を紹介したが、私自身はステージ 1,2,3 とともに落ちこぼれである。

なお、オリジナルの探求現場は大概孤独。公明正大なる第 3 者の立会などあり得ない。オリジナリティが、先行着手順位の争いになったとき、stage2 で作成したノートに記載された精密なタイムテーブルが着手時期を保証する

**高専**に配転後、輪講を高専で実施することを試みた。このままでは無理なので、テーマを卒研内容に絞りと、担当卒研グループ間で毎週、その週の研究の前進分を発表するという方法である。この方法はかなりの成果があったが約 3 割の卒研生にとって、プレゼンテーションの練習にしか見えなかったようである。

2018 年。小学 1 年生から大学生まで教育真つ盛り。やらないよりやった方がまし、という意味で消極的には賛成。回数を減らして空いた時間を発表内容の充実に充てる選択肢もあると言いたい。

以上